名古屋女子大学　紀要　66（人・社）213～224　2020

鑑賞教材における音楽的要素・イメージを観点とした一考察
―幼小接続を視野に―

坪井　眞里子

Thinking about the Image of Musial Elements in Music Appreciation Considering the Connection between Kindergarten and Elementary School

Mariko TSUBOI

【抄　録】

明治以降、唱歌遊戯を起点とする「お遊戯」は、音楽や歌の歌詞に合わせた身体表現を、全員で一斉に行う活動が主たるものである。これらは、子どもの自発的な表現とは言い難い側面を有する。なぜならば、それらは指導者の発案によるものであり、自発性を伴っていないからである。改訂された幼稚園教育要領においても、子どもの自発的な総合的表現力を育む重要性について明記された。本稿は、幼児の音楽感受能力に着目し、小学校で使用する鑑賞曲を用いて、幼児の音楽を感受する能力の可能性を検知する為の評価基準（実践上での評価）について考察を行うものである。方法としてオーケストラ譜・ピアノ譜を基に、音楽を形作る要素として拍・リズム・強弱・音色・フレーズについて分析を行う。これらの楽曲分析を基に、幼児の音楽感受能力について示唆できる指標を提示することを目的とした。幼小接続を視野に低学年のオーケストラ曲を使用する事とした。結果として楽曲は、子どもがイメージし易い曲、打楽器を有効に使用し、音色の違いを検知しやすい曲、構成についても、三部形式で理解しやすい作りとなっていることが認知された。これらの楽曲を用いて子どもの音楽感受能力を、評価基準から明確化する。本稿は、今後実践で幼児の自発的表現能力の可能性分析・音楽感受能力と表現について考察の基礎となるものである。

【キーワード】　幼児　鑑賞　音楽的要素　イメージ

緒　言

音楽科における鑑賞領域は、小学校においてはじめて学習内容として扱われる。鑑賞は低学年において、楽曲の雰囲気を味わって聴くこと、演奏の楽しさを見出すこと、曲の構造や関わりに気付くことが目標となる。その内容から、小学校への接続において幼児期にある程度の素地が期待・予想されていると考える。平成29年３月に改訂された幼稚園教育要領において、日頃の生活や遊びを通して豊かな感性が育まれ慣れ親しむことの重要性が再確認され、幼児期に育みたい資質能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。そうした背景から、幼小接続を視野にいれた５歳児の音楽の鑑賞・表現領域における理解能力について、あ

る程度の目安を持つことが必要であると考える。５歳児における音楽知覚能力については先行研究「幼児の音楽能力の発達に関する研究（Ⅰ）」「幼児の音楽発達に関する統計的分析 - Ⅰ年齢に伴う各能力の発達」黒瀬（1987）[1] において、幼児へのアンケートをとる方法（○×式）で実証を試みた。また今井・吉村・堀内（2010）[2] は、音の知覚が５歳児において言語表現に変換可能であり、歌う表現においてメロディの輪郭が整ってくるという実証を行っている。これらの結果から入学前の段階において、音楽の拍感・リズムの変化・フレーズ感・音の強弱・音色において、ある程度の知覚がなされていることが認識されている。本稿は進行中の実践研究「幼児の音楽感受と身体表現」での使用楽曲の分析・楽曲の中の音楽的要素を考察するものである。幼児における音楽感受の評価基準について考察を行う。音楽においては、「聴く」「感受する」ことから、曲の内容に基づく「自然な動き」を自発的に生み出すことがポイントとなる。子どもの自発的な音楽感受の動きを導きだす観点から予測される動きを考慮に入れ、楽曲の分析と評価について考察を進める。

１．小学校低学年での鑑賞の内容

幼小接続を視野にいれ小学校の鑑賞教材をとりあげる。第１学年の鑑賞教材には分野として、ポップス・クラシック・日本古謡などが含まれる。鑑賞教材は指導者が授業内容の主旨に沿ったものであれば選択することが可能である。教科書は教育芸術社と教育出版社があり、第１学年の鑑賞教材は以下の通りとなる。

教育芸術社：「さんぽ」中川李枝子作詞　久石譲作曲　題材『音楽にあわせて体をうごかしてみよう』
「しろくまのジェンカ」平井多美子日本語詞　ケン　ウォール作曲
「みつばちのぼうけん」橋本祥路作曲
「おどる　こねこ」ルロイ・アンダソン作曲
「シンコペーテッド　クロック」ルロイ・アンダソン作曲
「さんちゃんが」「おおなみ　こなみ」わらべ歌
「ラデッキー行進曲」ヨハン・シュトラウス（父）作曲

教育出版　：「サンダーバード」グレイ作曲
「なみを　こえて」ローサス作曲
「どうけしのギャロップ」カバレフスキー作曲
「ピンク・パンサーのテーマ」マンシーニ作曲
「ぞう」サン・サーンス作曲
（題材『曲にあわせてからだをうごかそう』）
「ジェンカ」レーティネン作曲
「ドレミの歌」ペギー葉山作詞　ロジャーズ作曲
「こうしんきょく」チャイコフスキー作曲
「おどる　こねこ」ルロイ・アンダソン作曲
「おもちゃのへいたい」イェッセル作曲

教育出版社の教科書では、第１学年の始めに「サンダーバード」「なみをこえて」「ぞう」「どうけしのギャロップ」「ピンク・パンサーのテーマ」の曲を使って『きょくに合わせてからだをうごかそう』という題材を提示している。学年の初期段階で、身体表現を伴う音楽活動を行うことは、その後の音楽の聴き方に大きく係わると考える。教育芸術社では、「さんぽ」の教材において『きょくにあわせて、からだをうごかそう』を題材としている。音楽の知覚・感受において身体表現を伴う活動は、効果的な音楽理解に繋がるものである。

小学校学習指導要領（平成29年３月）における、Ｂ鑑賞の第１学年・第２学年の目標は以下の通りである。

ア　鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見いだし、曲全体を味わって聴くこと。 イ　曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。

低学年においては、児童が音楽に親しみ、楽しいと思えるような鑑賞の活動が必要となる。旋律を口ずさんだり、音楽に合わせて体を動かしたりする等の活動を効果的に取り入れることが推奨されている。曲の演奏の楽しみを味わいながら、全体の気分を把握し、音楽全体を味わって聴く楽しさを感じとることが重要になる。アに関しては、主に「思考力・判断力・表現力」に関する資質・能力である。イに関しては、鑑賞の「知識」に関する内容であり、曲想と音楽の構造の関わりに気付くことをねらいとしている。音楽を身体動作を伴って聴き、イメージや要素の感受に繋げる事が示唆されていると考える。以上の理由から本稿では、イメージが容易な「シンコペーテッド　クロック」「おどる　こねこ」をとりあげる。

２．主に音の音色を楽しむ教材 第１学年

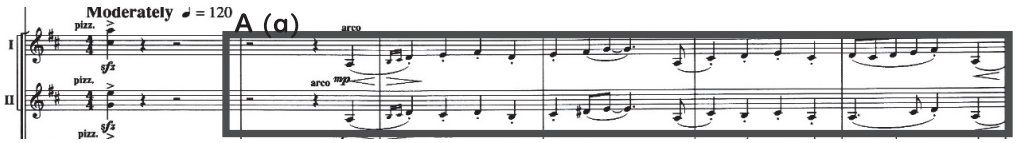
『シンコペーテッド　クロック』（ルロイ・アンダソン作曲）[3)]

ルロイ・アンダソン（1908 - 1975）はアメリカの作曲家である。アンダソンの曲は、大変軽快で諧謔的な作風であると言われている。ハーバード大学で言語学の研究員であったが、同大学の学生歌を編曲したところ、それがボストン交響楽団の指揮者アーサー・フィードラーの目に留まり、作曲家への転身するきっかけとなった。『シンコペーテッド　クロック』は第二次世界大戦後1946年に作曲され、ゴールドディスク賞を受け大ヒットとなった曲である。子どもが聴く曲としては、古典的なクラシックと比べて大変イメージし易い内容であること、また内容が日常の事象をとらえている曲も多数あることから、小学校の鑑賞教材として適していると考える。

曲は描写的で時計の秒針がウッドブロックで表されている。またトライアングルによって時計の目覚ましが鳴る様子が表現されており、身近な打楽器が演奏の中で大切なキーポイントであることから、子ども自身が演奏に参加する疑似体験も可能である。題名の通りシンコペーションが随所に現れ、ユーモラスな動きが随所に現れる。以下、音楽の共通事項をもとに分析を進める。譜例はオーケストラスコア（Belwin ORCHESTRA版）アンダソンによるピアノ版（Alfred社）の楽譜を用いる。

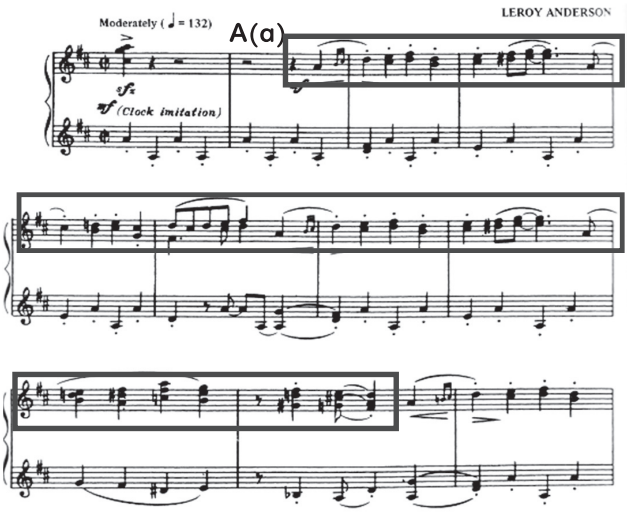
２．１　曲の構成

全体の構造としてＡ（aba）Ｂ（aa`）Ａ$^{2}$（aa`）の複合三部形式となっている。子どもにとっては、「はじめ・なか・おわり」で理解できる。調性はニ長調。主旋律はアウフタクトで始まり、時を刻み始める緊張感がはじめに感じられる。弦楽器により主題が奏でられる（譜例１）。Ａ（ａ）



譜例１（スコア・ヴァイオリン）

の第一主題（譜例２）が、一つのテーマとして繰り返し奏でられ、途中フルート・オーボエによるオブリガードが加わる。主旋律は音をスタッカートの指示があり、時計の針の進む様子が表現されている。



譜例２（ピアノ版）

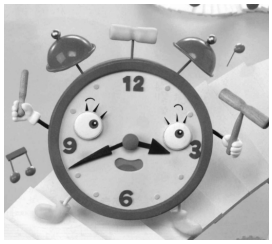
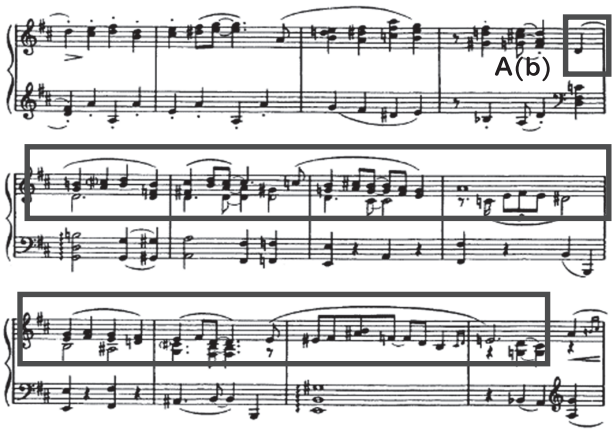


図１　「小学生のおんがく１」p44

Ａはabの２つで構成されており、前半の時計を刻む規則的な表現を経てレガートで滑らかなフレーズ感に移る（Ａ（ｂ）第二主題　譜例３）。スラーが連続で示され、旋律の流れが必要であることが譜例からも読み取れる。

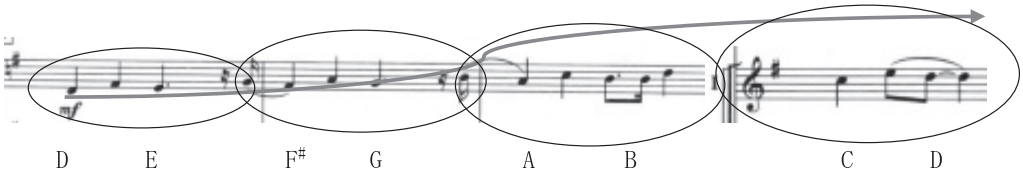


譜例３（ピアノ版）

ここではウッドブロックの動きは静止し、流れるようなメロディがヴァイオリン・フルート・クラリネットによって奏でられる（譜例３）。

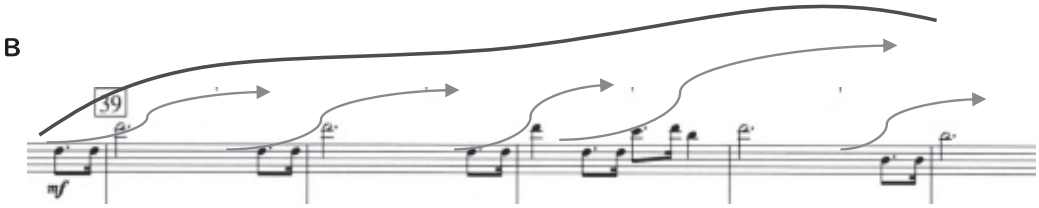
ＡからＢへの移行は、D-durから下属調G-durに転調し、音を刺繍（経過音）しながら、４

段階で１オクターブ上昇していく（譜例４ヴァイオリンパート）。上行形で、属音のＤに順次進行することで、曲想が展開部に入る解放感・ワクワクしたイメージを導く。



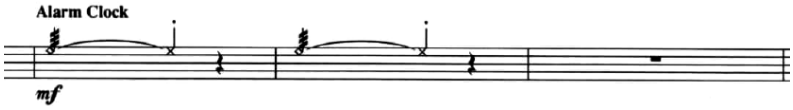
譜例４（スコア・ヴァイオリン）

１オクターブの跳躍を４回一括りとしたパターンで、円を描き、流れるような滑らかなメロディラインを描く。



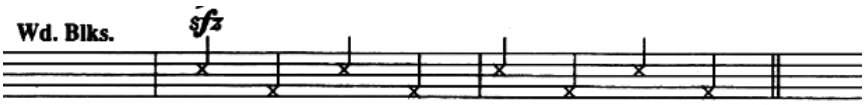
譜例５（スコア・ヴァイオリン）

Ｂの展開部分は、開放的なＤの１オクターブとe-moll（G-durの並行調）の雰囲気を持つＢの１オクターブを一つのまとまりとして、２回繰り返される。跳躍時（例：39小節・40小節）にトライアングルの目覚ましの音（ロール奏法）が効果的に煌めくように２回鳴らされる（譜例６）。



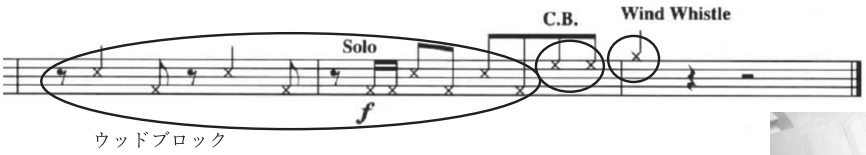
譜例６（スコア・トライアングル）

展開部の最後ウッドブロックの時計の音のみが残り（譜例７）、Ａの再現部が始まる。調性はG-durからD-durへと戻る。



譜例７（スコア・ウッドブロック）

再現部Ａ^{2}は、前半Ａ^{1}の第２主題を省いた形式で第１主題のみで最後の部分に入る。途中時計が壊れそうな躓きを表現しながら、最後には壊れてしまう結末となる（譜例８）。



譜例８（パーカッション）

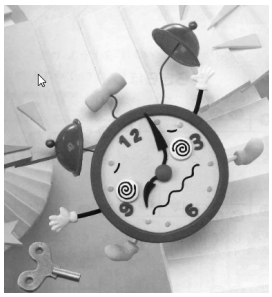


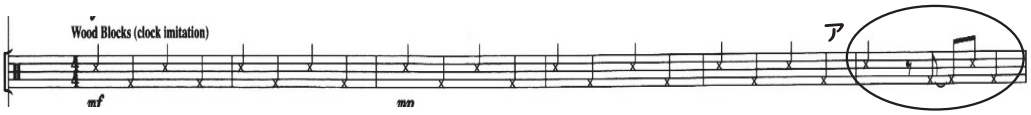
図２　教育芸術社「小学生のおんがく１」平成31年２月10日発行p45

最後のパーカッションはウッドブロック－カウベル（C.B.）－ウィンドホイッスルで、次々と音を繋いでいく。これまでなかった音色が出現することで規則的に動いていた時計が混乱し、壊れてしまった様子を突拍子もない音の出現で表されている（譜例８）。図２は教科書に掲載の壊れてしまった時計の挿絵である。

２．２　音楽的要素における音楽感受の目安

（１）拍

幼児・児童にわかりやすい４分の４拍子の規則的なリズムが基本となる。時折不規則にリズムア（譜例９）が刻まれる。複雑で短い為、幼児には対応できないことが予測される。



譜例９（ウッドブロック）

（Clock imitation）と記載されているように、時計のように規則的な演奏となる（譜例９）。基本的に４拍子の拍の動きができれば拍の理解はできたものと考える。

（２）リズム

ウッドブロックはフレーズの区切れの部分において、シンコペーションのリズムを刻む。ここでは時計が壊れてしまいそうな躓きを想像させる（譜例９ア）。児童においては、感受・知覚することができると考える。また、最後の時計が壊れる結末のリズムの変化について、幼児において変化を感受することができるが、リズムは完全に模倣することができないと予測する。全体を通してウッドブロックの音の真似をしようとする姿が期待できる。

（３）強弱

展開部Ｂにおいて、音は上行形を繰り返しながら広がり強くなる（譜例４・譜例５）。曲の盛り上がりがどこにあるかを把握することが容易となる。大きな流れを持ちつつ、曲の盛り上がりを形成することから、音の強弱と広がりから音楽の構成「はじめ・なか・おわり」の変化を感じとることができると考える。

（４）音色

楽曲の中でパーカッションの音色が曲想の変化と一致することから、ウッドブロックの演奏される場所・トライアングルの演奏される場所（譜例６）の音色に気づくことが基準となると考える。トライアングルのロール奏法で時計のアラームの鳴り響く音を、キラキラとしたイメージで捉えることができる。

（５）フレーズ

児童・幼児のわかりやすい部分として、Ｂ中間部分流れるような滑らかなフレーズ感が挙げられる。動きが跳躍を感じていること、何回も跳躍したフレーズが繰り返されることに気付く表現・動きがあることが期待される。Ａのはじめの部分は､テーマの旋律の区切りを感じとり、児童の場合は歩く方向を違えたりすることも予想される。

３．主にようすを思いうかべる教材　第１学年

『おどる　こねこ』（ルロイ・アンダソン作曲）[4)]

前述したルロイ・アンダソンの作曲であり、子どもたちがイメージを作りやすい曲である。子猫たちが踊る様子を４分の３拍子で演奏している。猫の鳴く様子がヴァイオリンで、曲線的に演奏される場面が何度も現れる。また、走り回ったり・毛玉で遊んだり・ボールで遊んだりする様子も想像できる。幼児においては、３拍子のリズム・流れに馴染むことが難しいと想定される。教育芸術社の教科書では、歌唱共通教材「うみ」が「おどる　こねこ」の題材の前に設定されており、３拍子の認識をした上で継続的な課題となっている。強弱弱の３拍子を授業の中で再認識することが想定される。幼児は、３拍子の認識を予め行う必要性がある。手拍子やスカーフ、フープ等を使ったゆっくりとした動きで、曲線的を伴い３拍子を表現できる。中間部分では、ウィンドホイッスル・ウッドブロック・クラッシュシンバルが使用され、音色の違いから変化に富んだ素早いコミカルな動きが表現されている。猫のしなやかさは、ヴァイオリン等の弦楽器によって全体を通して表現されている。最後の場面は、犬の出現（鳴き声）で子猫たちの慌てる動きと猫の怒った様子も想起させる。全体を通して身近な動物である子猫の戯れる様子を表情豊かに表現している作品である。アンダソン独自のユーモアと細かいディティールが散りばめられており、クラシックの概念に囚われない作風が見られる。彼の作曲はポップスとクラシックの中間に位置しており、判断は個々異なる。譜例は、アンダソンによるピアノ版の楽譜を用いる。

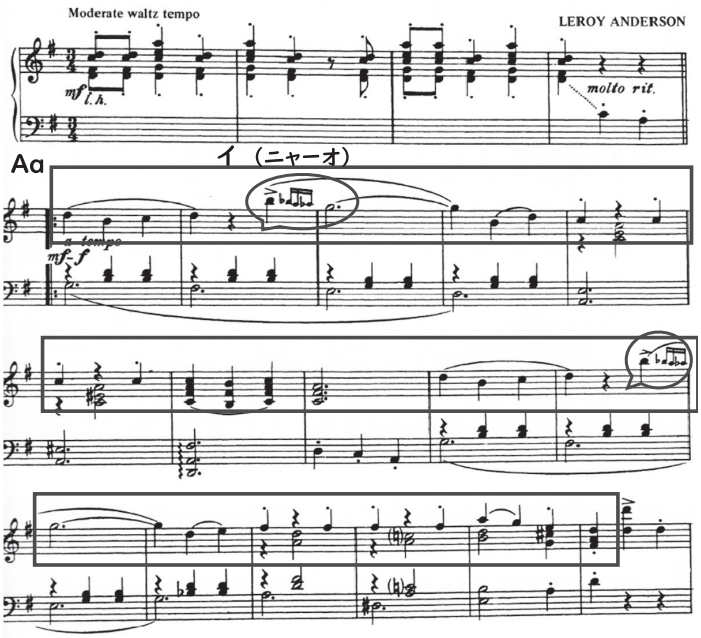
図３　「小学生のおんがく１」p38

３．１　曲の構成

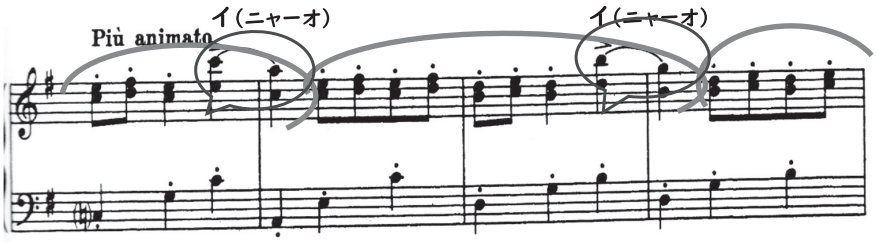
構成はＡ(ab)BA^{2}の複合三部形式となる。｢はじめ・なか・おわり｣と子どもには認識できる。はじめの４小節の序奏から優雅な３拍子に入る。序奏は最後の場面でmolt ritの指示があり、主題に入る緊張感を持続して主題を導く。主題**Aa**は16小節の旋律で構成され、８小節のフレーズのまとまりが２回反復されている。猫の鳴き声音形**イ**（ニャーオ）が模倣され長３度で表現されている（譜例10)。

Abは、はじめの８小節のフレーズ感とは変化し、子猫の細かな動きが表現されている。

Più animato・スタッカートの指示があり動きの細やかさが理解できる。ここでも**イ**（ニャーオ）の音形で、ヴァイオリンで子猫の鳴き声が模倣される。長３度の下行形が効果的に生かされている。８分音符に分割されることで、動きがより明確に表現される。**A**は反復され、２回目はより速い速度で演奏されている。Ａは３拍子がしっかりと感じられ、同時に子猫の鳴き声とともに愛らしい様子・仕草がイメージできる（譜例11)。図４は教育出版社に掲載されている「おどる　こねこ」の挿絵である。子猫が一緒に遊ぶ様子が描かれている。



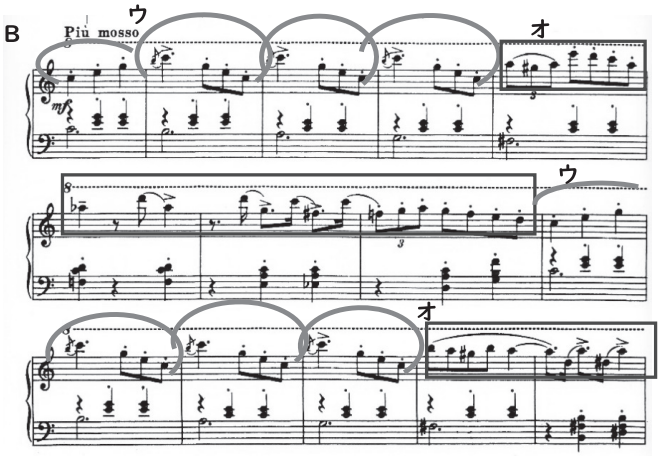
譜例10



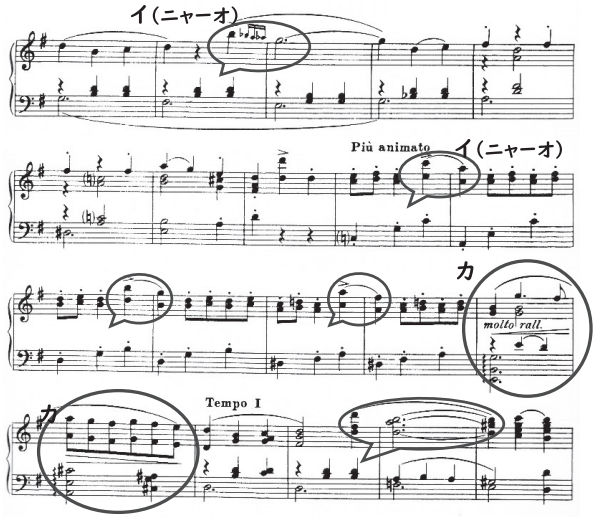
譜例11（Ab冒頭）

図４　「おどるこねこ」教育出版社p44

Bは大きく２つの違うフレーズ感が一つのまとまりとなり、繰り返しが行われる。**ウ**では、スタッカートと付点のリズムで飛び跳ねた音の跳躍が３回あり、高低が繰り返されることによる効果・動きが強調される。頂点の音にはアクセントが付けられ装飾音符も伴う。かなり飛び跳ねた表現となっている。また**オ**の部分では不規則なリズムと共に、ウッドブロック・ホイッスル等が使用されて、予測できない子猫の動きが巧みに表現されている（譜例12）。再び主題が現れるA^{2}は冒頭の序奏から始まる。後半ではAabは一度のみで最後のコーダに向かう。終わりに向かう直前に**カ**で子猫が大きな伸びをする様子が表現されている（譜例13）。ここでは



譜例12



譜例13

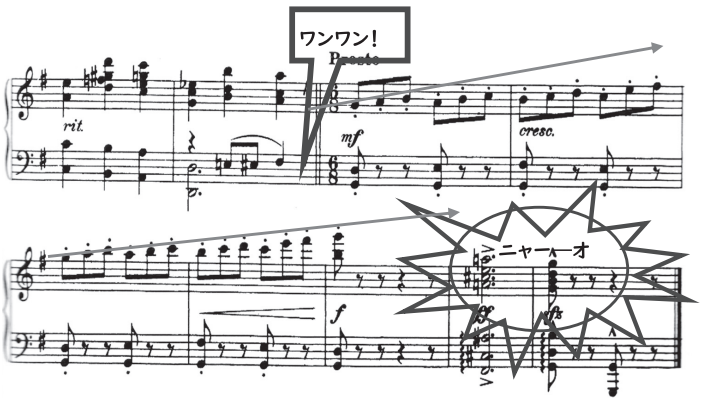
ゆったりとしたテンポになり、

子猫の鳴き声（ニャーオ）と伸びをする姿がはっきりと想起できる。カのリタルダンドの大きな伸びの後、テンポは始めのテンポに戻りゆっくりとした速さでコーダに向かう（譜例13）。

コーダ（譜例14）では、Prestとなり４分の３拍子から８分の６拍子へ大きな切り替えが起こる。周りの状況が一変した事が素早く示される。犬の鳴き声で子猫たちが驚き、一目散に逃げていく様子が表現される。

「はじめ・なか・おわり」で「子猫たちが遊んでいる様子」「子猫の遊びがエスカレートして飛んだりはねたり」「再び子猫たちが遊びゆったりしている所に突然の犬の出現で一目散に退散！」という様子が描かれている。

曲の冒頭のゆっくりとした優雅な３拍子からすると、最後は緊張感が高まった様子が鮮明に音楽の中に現れる。低音で８分の６拍子を２つに区切った２拍子とスタッカートで追い立てられる表現がなされていることも効果的である（譜例14）。



譜例14（コーダ）

３．２　音楽的要素における音楽感受の目安

（１）拍

４分の３拍子の強弱弱を感じるとことは、児童においては学びの要素となるが、幼児においてはさほど必要でないと考える。大きな流れとして３拍を一つのまとまりとして感じることはスカーフやフープ等のリトミック教具を用いて体感することが可能である。テンポの変化があり、その変化に気づくことが期待される。

（２）リズム

リズムの変化に伴う子猫の動きを感じ取ることが望ましい。中間部分の３回の音の跳躍は変化の大きく感じられるところであることから、聞き分けができ易いと考える。最後の２拍子にも取れる動きは、素早い動きに変化すれば感じ取れていると判断する。

（３）強弱

最後の部分で一番大きなダイナミクスの変化となる。迫ってくる危機感とともに音は強くなる。前半は優雅なワルツの３拍子で流れるような動作があれば十分である。

（４）音色

全体を通して、子猫の鳴き声の気づきがあることが望ましい。B展開部のパーカッションの音から子猫の遊びの様子が想起できる。変化に富んだ音色を気付くことが想定される。

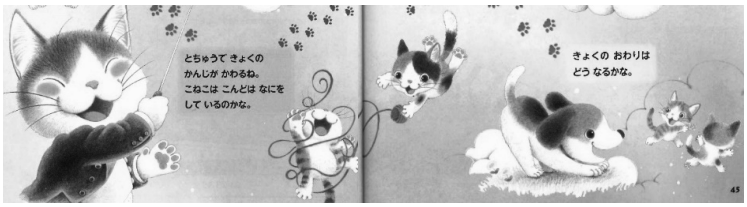


図５　教育出版社「おんがくのおくりもの１」p44・45

（５）フレーズ

３拍子の流れるようなフレーズ感が大きな特徴となる。ワルツであることから大きな流れが随所にある。またそこから短いフレーズ感に変化するところもあり、その変化と動きが一致していくことも期待される。

４．考察

４．１幼児における音楽感受評価の目安

聴く―感受（イメージ）―身体反応（表現）のこの流れがどのくらい幼児において可能であるのか。実践研究「幼児の音楽感受と身体表現」で一番重要なところは、まず子どもの反応・動き・表現を重視するところにある。子ども達はクラシックを聴くことも慣れていない状況である。アニメ映画の曲を選曲することは、音楽よりもキャラクターのイメージが先行してしまう。子どもの自由な発想を引き出すという観点から、あえて第１学年の教材の中でもクラシックに属するものを選曲した。音楽感受の評価の基準として、本論で挙げた拍・リズム・強弱・音色・フレーズを基に幼児の音楽感受能力の基準を以下のように設定する。

『シンコペーテッド　クロック』（ルロイ・アンダソン作曲）

１．曲のはじめ４分の４拍子の拍を刻むことができる

２．壊れそうなリズムはほとんど気付いたとしても模倣することはできない

3．第２主題への変化を気付くことができる
4．中間部分の跳躍トライアングルのアラームの音に気付くことができる
5．流れるフレーズ感で教具をつかって表現できる
6．終わりの部分への変化を理解できる
7．最後の時計が壊れた場面を表現できる
『おどる　こねこ』（ルロイ・アンダソン作曲）
1．子猫の踊っている場面をイメージできる
2．教具をつかって３拍子の音楽を表現できる
3．子猫の鳴き声が聞こえる場所に気付くことができる
4．中間部分の子猫の踊りの変化・動きに気付くことができる
5．中間部分の３回ある音の跳躍・強弱に気付くことができる
6．大きな３拍子の流れで動くことができる
7．最後の場面で子猫が逃げる姿（速度の変化）をイメージできる

以上の内容を基準とする。実践研究では、全てビデオ録画を行い，身体の動きと子ども達の発する言葉や呟きからも音楽感受能力を評価する。

４．２　考察と今後

本稿は実践研究での使用曲の分析・考察を行ったものである。「シンコペーテッド・クロック」「おどる　こねこ」それぞれにおいて、イメージや音の変化に富み、子ども達がイメージを持ち易い曲である。子ども達はこれらをどのように捉えることができるのか。

幼児の音楽感受において、黒瀬（1987）「幼児の音楽能力の発達に関する研究（Ⅰ）」鑑賞（曲のイメージ）では、幼稚園時代にすでに高い確率で正解になると結論付けている。（音楽と視覚的な絵によるイメージ）調査方法は異なるが、幼児は大まかなイメージとして音楽をとらえることができると導きだした。また幼児における音楽感受・言葉やお話からのイメージの表現が可能であれば、音楽劇や遊戯の在り方も変化すると考える。指導者が設定した振り付けや演出で進めるのではなく、子どもたちの思い付きやイメージを加えて表現をする。そうした取り組みは、より子どもの考えや表現力・創造力を養うことができる。実際に子どもの主体性を重んじ発表を行っている園もあり、指導者はその可能性を引き出す・待つ作業が必要である。

明治以降の唱歌遊戯に起点をおく「振り付け」による音楽表現が行われているのが主流であるが、決められた動きに規定されることで子どもの想像力が阻害されていないかという懸念を持つ。幼稚園教育要領の項目において以下の通り示されている。

〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕

またこれらは、内容における自由な自己表現へと繋がる。

（８）自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

指導者が指導を行う際考慮すべき点を以下のように述べている。

（10）豊かな感性と表現
心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方など

に気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

子どもの想像力や感受する能力を育むことには、待つことが重要である。先取して、指導者が作ってしまうことが往々にしてあるが、できればそれを避けることが、教育要領にも提示されている自発的な表現ではないだろうか。音楽を「振り付け」ではなく、音楽そのもののイメージ・拍・リズム・強弱・音色・フレーズ感を身体表現に結びつけることで、より音楽の理解能力が深まる。そして主体的な個の発想から、友達と協働として行う表現も生まれてくる。教育要領の中の「自分なりに」は小学校指導要領の「主体的」に繋がるものである。（公）音楽鑑賞振興財団「季刊　音楽鑑賞教育vol.37」で「鑑賞における　音楽と体の動きの関連」が特集として取り上げられた。現在音楽を体感する実践が小学校・中学校での授業で行われている。幼児教育においても、自発的な表現力についての実践・研究が進み、音楽感受と身体表現の関連性が様々なメソードで重要視されている。今後、鑑賞そのもの在り方・音楽の感受と子どもの自発的な表現活動を注視し、音楽感受の実態把握・分析を進めていきたい。

【付記】

本研究は名古屋女子大学　総合科学研究所平成31年度プロジェクト研究「幼児の音楽感受と身体表現」の一環として行ったものである。

【注】

1）黒瀬　久子「幼児の音楽能力の発達に関する研究（Ⅰ）」「幼児の音楽発達に関する統計的分析 - Ⅰ　年齢に伴う各能力の発達」黒瀬（1987）下関短期大学
http://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp/sj/metadata/40　最終アクセス　2019.09.14

2）今井晥弍・吉村夕里・堀内詩子「幼児の音楽発達とリトミックに関する一考察―楽曲分析と事例検討をとおして―」臨床心理学研究報告（2010）

3）The Syncopated Clock Leroy Anderson（1908-1975）作曲

4）The Waltzing Cat Leroy Anderson（1908-1975）作曲

【引用・参考文献】

今井晥弍・吉村夕里・堀内詩子「幼児の音楽発達とリトミックに関する一考察―楽曲分析と事例検討をとおして―」臨床心理学研究報告（2010）

黒瀬　久子「幼児の音楽能力の発達に関する研究（Ⅰ）」「幼児の音楽発達に関する統計的分析 - Ⅰ　年齢に伴う各能力の発達」黒瀬（1987）下関短期大学

『これからの鑑賞の授業２』公益財団法人音楽鑑賞振興財団　平成26年

「鑑賞における　音楽と体の動きの関連」季刊　音楽鑑賞教育vol.37

（公）音楽鑑賞振興財団2019

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　音楽編』文部科学省　平成29年７月

『幼稚園教育要領』文部科学省　平成29年３月

図１・図２・図３「小学生のおんがく１」教育芸術社　平成31年　pp38.44.45

図４・図５「おんがくのおくりもの１」教育出版社　平成28年　pp44.45

譜例

・The Syncopated Clock　Belwin ORCHESTRA pp2-13

・Leroy Anderson 25Great Melodies as originally composed for PIANO SOLO Alfred社
　The Waltzing Cat pp44-43
　The Syncopated Clock pp102-105